

本を見上げていました。額に汗を浮かべ、目の下にはくまがありましたが、これまで趣海坊が見た中で一番美しい目を持つているのは疑いようありません。その黒い瞳を、徳本は吸い込まれるように見つめていたのです。

猫だましをご存知でしょうか。相撲の戦法のひとつで、顔の前で手を打ち、相手の虚をつく奇襲です。

趣海坊はそれをやりました。ぱちんと趣海坊が手をたたくと、徳本はやつと我に返って、顔を上げました。

「湯を沸かしてください。それと、そのわらを、娘さんの体のわきに敷き詰めてやってください。いや、それは趣海坊、おまえがやってくれ。柳行李はどこだ？ すり鉢も出してくれ。灸をすえたほうがいいかもしれない……さらしはありますか？」

てきばきと動く徳本の手を見つめ、趣海坊は黙って動きました。母親が持ってきた白湯と徳本の調合した薬を飲ませると、娘の咳が少しおさまりました。

徳本は娘の上を脱がせてうつぶせに寝かせると、背中の上ツボに灸を置き、母親に言いつつ火をつけさせました。

四つの灸から煙が立ちのぼり、家の中がしんと静まりました。娘の寝息が、心配する母親と徳本と、趣海坊の耳に届きました。

「——すごい」

言葉を発したのは、趣海坊でした。

あれほど苦しんでいた娘がすうすうと安らかに眠っているさまは、まるで魔法のようでした。

「まだ、安心はできません」

徳本は、母親に向かって言いました。

いつもの穏やかな笑みではなく、いまにも泣き出しそうな、自信のない困り顔を浮かべていました。

「なにか、精のつく、いいものを食べさせなくては。卵酒か、生姜酒はありますか。湯豆腐でもこの際いいでしょう」

「……いまは、あわとひえしか……」

母親はうつむいて、黙り込んでしまいました。

徳本は困ったように自分の柳行李をあさりましたが、やがて打つ手なしといった様子でため息をつきました。

「それなら、獣を食らえばいいだろう」

趣海坊がすつとんきような声を上げました。

「この家にはこれほど獣の皮がつるしてあるのだ。干し肉のひとつも食わせてやれば精がつく」

母親も徳本も、ぎくりとして趣海坊を見つめました。

この時代、獣の肉を食らうことは、あまりすすめられたことではありませんでした。徳本などはこの家に入った瞬間に、すでにいやな気配がして、ためらっていたのです。動物の皮をつるしているということは、ただでさえ徳本にとって「普通」ではなかったのですから。

「……これは馬の死肉です。皮は、売るために干してある